

## 二 生活上の困惑

### A 郵便

マニラ市内のコンビニストアで切手を売っている。ところが、十ペソと印刷されている切手が十三ペソなのだ。

郵便局へ行けば十ペソで買える。郵便局が少ないので、買いに行く交通費を考えれば安いものだ？ 合理的な『商品』価格なのか。

### 配達料金の請求

数年前、マニラ郵便局配達員がEMS（国際郵便「国際エクスプレスメール」）の配達料金を請求し始めた。二十円、わずかな金額なので誰も気にせず支払う。私は激怒した。配達業務まで含めて切手を貼付している。コレクトコール電話ではあるまい。コレクトコールでさえ相手の承諾が必要である。受取人が配達料金の支払いを拒否したら郵便局は返送するのか。郵便物そのものの受け取り拒絶ではないのだ。

マニラ本局へ抗議しても埒が明かないので、私は日本の郵政省に連絡した。次の回答が来る。

EMS郵便物が配達料を徴収されたとお申し出ですが、マニラ局が配達料を請求した事実関係および、その背景が不明であるため、早速、フィリピン郵政庁に対して、調査を要請したところであります。

平成四年一月二十九日 郵政省郵務局国際課長 大橋郁夫

マニラ郵便局配達員が発行した領収証のコピーを私は日本の郵政省へ送付した。それに対して次の返信が届く。

EMSの配達料は、当省とフィリピン郵政庁との合意では、追徴しないこととなっております。マニラ郵便局が貴殿から配達料を徴収した件につきまして、明らかに同局職員の誤った取り扱いによるものであり、これは今回のフィ

リピン郵政庁の調査でも確認されたところであります。このため、フィリピン郵政庁は、本事故に対して謝罪するとともに、事故の再演を防止するよう関係の向きに注意を喚起した旨の通報がありました。

平成四年二月二十七日 郵政省郵務局国際課長 大橋郁夫

そろそろ腹が立つて来る。誰が誰に対して『謝罪する』のだ。被害者の私は謝罪してもらっていない。しかも、配達料金徴収は相変わらず続けられているのだ。私の周囲は黙って払っている。私は再び日本の郵政省へ手紙を出した。

ずいぶんと私を舐めた返事が来る。

マニラ郵便局が、再度、配達料を誤徴収したことを知り誠に遺憾に感じるとともに大変申し訳なく深くお詫び申し上げます。フィリピンの郵政庁に対し、直ちに徴収額を返還するよう申し入れておりますので、誠にお手数ですが、同局に直接配達料の返還をご請求いただきますよう、重ねてお願いいたします。

平成四年三月十七日 郵政省郵務局国際課長 大橋郁夫

誰が誰に『返還請求』するのだ。どこへ電話しても真面目な返事はない。出向いたところで盤回しされるのが見えていてではないか。だいいち、八百円ほどの往復タクシー料金は誰が負担するのだ。日本からの郵政省の返信にしても拙宅まで配達されていない。マニラ郵便局に呼び出されて私はタクシーで受け取りに行っているのだ。郵政省に対する私の手紙は怒りに満ちたものとなる。次の返信が来た。

フィリピン郵政庁に対して、至急、謝罪および料金還付を行うよう要請いたしました。また、国際郵便業務におきましては、何らかの事故が発生した場合には損害を被られたお客様の請求に基づいて関係郵政庁が賠償を行うこととなっておりますので、本件につきましても、マニラ郵便局に直接、料金還付のご請求をいただくよう貴殿にお願いたしました次第であります。

平成四年四月十四日 郵政省郵務局国際課長 大橋郁夫

私が誰に『請求』するのか、請求相手の官職氏名くらいは知らせてもらいたい。私は粘り強く日本の郵政省と折衝を続けた。

後日、マニラ郵便局の幹部職員が私のところに来て、十ペソ（約二十円）を『還付』するものの謝罪はない。十ペソは職員へ差し上げた。

「ごとういう業務姿勢がフィリピン経済低迷の原因になっているのです。責職には分かって頂きたいものですね」

懽然たる面持ちの私を職員は怪訝な顔で眺めている。

### 切手泥棒

渡比の前、私は日本の業界紙（週刊専門誌）に小説を連載していた。毎週の郵送が面倒になり、二十回分の原稿を分厚い大型封筒にして郵便局窓口へ持ち込む。

「特別扱い郵便ですか」

窓口職員の質問に私は「急ぎの郵便物ではないので、いちばん安い普通郵便にして下さい」と答えた。その原稿が届かない。

「紙面に穴が出来てしまっじゃないか、原稿代など払えんぞ」

国際電話で業界紙社長に私は怒鳴られてしまう。

馬鹿な私は原稿をコピーしてなかった。同じ原稿は二度と書けない。立ち直れないほどのダメージを受けた。あちこち足を運んで不着理由を調べたが何も分からない。「郵便物は必ずコピーするものだ」という教訓を得た。

E氏オフィスが二百通もの大型封筒を日本へ郵送した。切手貼付作業を私も手伝っている。ところが一通も届かなかった。

オフィスのスタッフは切手泥棒（郵便局職員）の仕業と断定している。

いまは大量の郵便物（分厚い大型封筒）などはスタンプに出来る。

この二百通不着事件では寛容なE氏が怒って郵便局に抗議したが何ともならなかった。

### 郵便物泥棒

日本の知人にカレンダー送付を依頼したときの話である。七人の知人が私あてに郵送してくれた。二通しか届かない。郵便局窓口嬢に不着理由を質問してみた。

「局長さんの車のトランクに消えたのでしよう。でも、そんな話をしたら名誉棄損で訴えられ刑務所行きになりますよ」

窓口嬢は笑っている。「冗談と聞き流すのが賢明であるつ」。

郵便配達員宅の冷蔵庫が施錠されている。捜査員が鍵を壊して開けたら中には郵便物が詰まっていた。(こんな新聞記事を私は思い出した)

「EMSなら間違いなく届きますよ」

能天気な日本人から頻繁に聞かされる。

郵便局職員が強盗に襲われオートバイごと荷物を奪われた。荷物はEMS郵便物とのことである。(こんな新聞記事も『頻繁に』見掛ける)

強盗に奪われたEMS郵便物を如何にして配達するのか。

このほど国家警察は、郵便物(一三八通)を盗んだ疑いでカロオカン市中央郵便局の男性職員(三十八歳)を逮捕した。一三八通は、いずれも海外から届いた封筒(略) (まにら新聞「二〇〇四年十一月二十五日付・木曜日」)

## B 銀行

銀行の窓口嬢にも参る。並んでいる客を無視して同僚と何やら飲み食いしているのだ。日本人副支店長に私は抗議する。

「ずいぶん注意しました。しかし、叱れば翌日は無断欠勤です。臍首しても次に来るスタッフは更に悪くなります。私の無能ぶりを東京本社へ伝えて下さい。格下げでも結構です。日本に帰国したいと思っています」

これでは私も怒れない。もう一つ問題がある。並んでいる客が文句を言わない社会風潮だ。これには苛々する。あるとき預金しようとして、やや大きな額の現金を持参した。三人の窓口嬢が集まって『迷惑です』と言う。怪訝な顔の私に説明してくれた。

「この紙幣を数えるのは私たちです。私たちの仕事が増えて今日は厄日です」

数え始めて間もなく、窓口嬢全員が消える。私は一時間も放置された。過剰冷房で私は体調を崩してしまう。

窓口嬢たちは昼食休憩で立ち去ったのだった。

窓口嬢の書く数字が私には読めない。どう見ても『4』なのだが、これは『6』だった。日本からの送金が届かない。6と書くべき通帳番号が4では送金も届かないはずだ。

フィリピン英語にも惑わされた。『TH』の『H』が無視されて発音される。『千』は（サウザント）でなく（タウザント）なのだ。

ある日、午前九時、散弾銃を携えた警備員が銀行入り口を開けない。抗議する私を警備員が怒鳴る。

「まだ、銀行員が窓口に着席してないではないか、見たら分かりそうなものだ。この盲野郎め」

本当に「お客様は神様じゃない」のだ。

窓口で伝票を書いていたら別の警備員が泥靴のままカウンターに上がって来た。足首を掴んで引きずり下ろしたい衝動に私は堪えるしかない。

## C 領収証

日本でも大切な紙片だが、フィリピンでは思いがけない場面で重要な証拠物件となる。スーパーで買い物をしたとき、外へ出られなくなってしまった。両手に大きな荷物を抱えたまま立ち往生となる。

拳銃を腰に差した警備員が領収証（レジの紙片）と荷物とを照合するのだが、そんなもの私は屑箱に捨ててしまった。

いくら押し問答しても警備員は納得しない。いくつもスーパーの小部屋を引き回された。私の荷物は売り場に戻されレジ係員の証明書が発行される。

奥の部屋に構えた偉そうな男の書き付けを頂いて、二時間後、やっと解放された。

病院の出口での出来事は、さらに悲劇的である。腸チフスで一週間も入院した。

大荷物を持つての退院なのに入院経費の支払い証明書を提示しなければ警備員が通してくれない。

（どの荷物に押し込んだのか？）狭い通路に荷物を広げて探した。最後の包みを解いた

とき領収証が出て来る。

『体調が悪くなるのではないか』と心配になった。

もう一つ書き加えたい。

引越しのトラックがビレッジ（住宅区画）警備門で止められる。

警備員が『家主の許可証を見せる』と言うのだ。

持っていない。

『なければ家賃の領収証でもいい』となった。

それなら持っている。ただし、引越し荷物の中だ。トラックのロープを外して荷解きとなる。

なんとも難渋した。

契約時間が大幅に超過して高いトラック賃貸料となる。

いくつもポケットのあるシャツを買って求めて領収証を肌身離さず持ち歩くしかない。

## 四 社会の断片

### A 犯罪の様相

一〇十月期に発生した殺人事件は前年同期比二%増の四千八百六十八件だった。一日当たり十六件発生している計算。英字紙各紙が報じた。

（まにら新聞「二〇〇一年一月二十八日付・水曜日」）

私の住んでいたマンションでも殺人騒ぎがあった。警備員同士の喧嘩で片方が射殺され犯人は逃亡している。

別のケース。

深夜、知人の工場で二人の若い従業員が争っていた。翌朝、ナイフで刺された死体が溝に横たわっていた。

その後、八年、いまだに犯人は逮捕されていない。

一九九九年、フィリピンの殺人事件は、九千六百二十九件。

(在比日本国大使館『フィリピンに於ける安全対策』)

日本の殺人事件数に比べて、十三倍。なんとしても、この数字は頂けない。

次は死刑判決の数字。一か月で二十三人。日本より人口の少ない(約八千万人)フィリピンでの数字だ。

今年七月に一審で死刑の判決を受けた死刑囚が二十三人に上り、収監中の死刑囚は計一千八百十五人となった。

(まにら新聞「二〇〇一年八月十三日付・月曜日」)

義理の父親が日常的な加害者という少女強姦による死刑判決が目立つ。

パサイ地裁は十七日、義理の娘(八歳)をレイプしたとして、パサイ市在住の男(四十二歳)に死刑二回の判決を下した。

(地元タガログ紙『テナポ』二〇〇一年一月十八日)

次は禁固(百七十年)の実刑判決。

十一歳の少女をレイプしたとしてH下院議員に最高裁は禁固百七十年を言い渡した。同被告は判決後も獄中から下院議員に二回立候補し当選している。

(まにら新聞「二〇〇一年十一月二十日付・火曜日」)

## B 次皿む

秋田は定置網の漁獲を日本へ輸出している。何年かの苦闘で事業は安定して来た。その間、右腕として仕事を支えてくれたワイマルには絶大な信頼を寄せている。秋田が日本に帰国したときは従業員の給与支払いも任せていた。定置網の一部を新しくする何千万円かの資金を持って帰比した秋田を致命的な災難が襲う。その現金が盗まれたのだ。保管場所

を知っているのはワイマルだけなのだが、秋田は右腕を疑いたくない。

新車を購入したワイマルが邸宅新築工事も始めた。秋田としても、そんな資金の出場所を追及しなければならぬ。ワイマルは平然と答える。

「俺にも運が向いて来たな、宝籤たからくじに当たったよ」

ついに秋田は地元警察署を尋ねる。

「捜索費、何万円だ」

警察官の言う意味が秋田には分からない。何度も聞き返した後、秋田は要求された金額を警察官に渡した。

この件くだりを関係者（当局）に咎とがめられたら私は助からない。新聞記事を引用する。

捜査を依頼すれば『ガソリン代を先にくれ』『長距離電話料金を先にくれ』

となる現状（略）（まにら新聞〓二〇〇三年九月十五日付・月曜日）

もはや秋田には事業を継続する資金力がない。

（犯人が検挙されても盗まれた現金は戻らない。日本に帰り出直そう）

日本でも信頼に裏切りで応える事例を見掛ける。フィリピン人も同じだ。

われわれ日本人と同様に『恩』や『義理』の感覚を持っており、『恩知らず』

の人間は、ピリピノ語で『ワラン・ウータン・ナ・ロオブ』と呼ばれて軽蔑される。（『海外生活の手引 第3巻 東南アジア篇』世界の動き社）

いろんな書物に右記と同じ記述を見掛けるけれど、ワイマルのような庶民が余りにも多い。

『恩知らず』な人間が大勢いる事実も書かなければ片手落ちになる。むしろ、それを強調していれば秋田のような被害者が出るのを防げたのではないか。

## もう一つの事例

フィリピン人女性と結婚した三国は日本の会社を退職しマニラで自動車部品輸入業務を始めた。仕事は順調に伸び、二人の子供にも恵まれる。部品業者との打ち合わせで三国は



定期的に日本へ行き半月ほどで帰比した。今回は留守中の様子が違う。部品倉庫が空になっているのに売上傳票がなかった。詰問する三国に義理の兄弟たちは答ええない。笑いながら模造拳銃を弄もてあそんでいる。なおも問い詰める三国の頭上を目掛けて発砲する。同席していた夫人は三国を庇かばわなかった。夜は子供たちも夫人も兄弟の家屋に泊まり込むのだが三国が行つても玄関を開けない。

翌日は従業員たちの態度が悪かった。三国の指示を無視する。数人の見知らぬ男が倉庫に入り残った部品を搬出しようとした。阻止しようとする三国を義兄弟たちが暴力的に倉庫から押し出す。ときおり模造拳銃発射音が工場内に響く。身の危険を感じた三国は外へ避難した。会社は三国夫人の名義になっている。法律的に何ともならない。三国は妻子を捨てて日本へ撤退した。

### 私も年金を次皿まられた

日本から年金を届けてもらつても『円』では使えない。『ペソ』に換金するのだが、為替相場の変動は慌ただしいものだ。

その日は極端に交換比率が悪かった。(明日か明後日まで待とう)と私はE氏オフィスの金庫に現金を預けた。

『ここは日本と違います。何か発生しても補償は出来ませんが……』と言うE氏に私は『結構です』と答える。まさか何かが起こると思っていなかった。その何かが起こったのだ。

その夜、E氏オフィスのドア、社長室のドアが破られ、ボール状のもので金庫の横腹に穴が開けられる。かなり大きな物音が何度もしたはずだ。近くには拳銃携帯の警備員も徹夜勤務のホテルボーイもいる。これらの人間たちは何をしていたのだ。

年金は生きる糧かたなので私は日本の知人へ連絡して寸借で凌しのいだ。しかし、E氏は事業資金を失つて、その後、長期間、経営の立て直しに苦しまれたらしい。

### 引つ越し資金金を次皿まられる

何回も引つ越したが、荷造り最中に現金を盗まれたときは本当に参ったとしか言いようがない。

六十万円入りの封筒を引越し荷物の上に置いた。

そのころは千ペソ紙幣・五百ペソ紙幣が一回ってなくて百ペソ紙幣入りの封筒なので、分厚くてポケットに突っ込めない。しっかり持って手放さないようにしていたのだが何かの拍子に手の封筒が邪魔になり荷物の上に載せた。それでも封筒を見ながら荷造りしている。

いつ目を離したのか一瞬の間だった。

『封筒がない』と叫ぶ私を拙宅のメイドとか近所の男とか作業中の何人かが振り向く。誰もが『何か起こったのですか』という顔つきをしていた。

ちょうど家主が来たときの出来事なので、裁判官をしている家主が全員の身体検査をする。とうとう封筒は見つからなかった。

引越し日程を変更して日本へSOSとなる。

埼玉県の空手道場主から六十万円を届けて頂いた。

お電話で『三十万円は可能なときに返済して下さい。残りの三十万円は差し上げます』と仰言られる。

六十万円全額を返済する積もりだが、まだ完済していない段階だ。

## メイドの夫が持ち逃げ

次は年金の届いた日の出来事。ある程度の金額は預金して、家賃とか電力料金とか何しかの支払い予定金額を鞆に入れ、いつもの通りメイドの夫に鞆を持たせる。ジブニーの中で私は眠ってしまった。目が覚めたら彼がいない。

（おかしいな）と思いながら私は帰宅した。翌朝になってもメイドの夫は現れない。メイドは泣き喚ぐが、知人は『ぐるだよ』と冷静だ。そもそも大金の入った鞆を誰かに持たせるなど大馬鹿者の典型だ。

## なんでも次皿む

盗水用水道管五百本

今年上半期被害総額

四百万ペソ（一千万円）

（まにら新聞＝二〇〇一年八月十二日付・日曜日）

この新聞見出しだけでは何が盗まれたのか分からない。盗まれた『もの』は『水』なのだ。被害者は水道局。水を盗むために使われた『管』を押収したという内容の記事だった。

高圧電線約二トンを切断して運び去ろうとした七人の男のうち三人を逮捕。

(まにら新聞「二〇〇一年十二月三十一日付・月曜日」)

送電鉄塔に登って高圧線を切断、約三トンの高圧線を盗んだ窃盗グループ七人が逮捕された。  
(まにら新聞「二〇〇二年四月九日付・火曜日」)

マンホールの蓋泥棒を徹底検挙へ

(まにら新聞「二〇〇四年七月四日付・日曜日」)

## C 嘘

『盗』と似た傾向に『嘘』がある。何十回も道を尋ねて気付いた。まったく大勢の皆さんが嘘を教える。道端の庶民も散弾銃を構えた警備員も警察官ですら次々に嘘を言うのだ。巨大スーパーで店員に売り場を尋ねても嘘が多い。私は店員に案内してもらおうようにしているが、たいていは目的の売り場に着いても違うのだ。案内した店員が別の店員に尋ねると、また嘘を教える。引き回されている本人以外には喜劇だ。

なぜなのか、いろんな人に質問してみたところ『知らない』と答えるのが恥ずかしいのだと言う。

道順など知らなくても、その人の知識にも人格にも関係ないではないか。嘘を教える方が恥ずかしい行為ではないか。相手の被害を考えれば犯罪と同じではないか。

## D 塵芥と牛エキ

七月の初め、マニラ首都圏の塵芥集積場で、塵芥の山が崩れ二百人以上の死者が出た。この悲惨なニュースを聞いても私には何も出来ない。せめて、被災家族の一人でも、拙宅のメイドとして雇えないか、私は伝を求めてみた。

災害で父母を失った五人姉妹の長姉が拙宅に来て働き始める。痩せて小柄で肌に張りがなく十八歳には見えなかった。初対面のとき十歳前後と思ったくらいだが、よく気が付い

で、よく働く。とくに塵芥捨てに何度も階下へ走った。

マニラ都心では塵芥回収トラックが毎日のように巡回している。このトラックが来る度にメイドは部屋を駆け降りた。従業員が塵芥を積み込む手伝いをする。そんなときのメイドは生き生きしていた。三か月が過ぎたころ、メイドが辞めたいと言った。

「たくさんの給料を頂き、きれいな部屋で寝させてもらい、贅沢な食事を摂り、何の不足もありません。でも、塵芥投棄が再開されたのです」

私の慰留を振り切ってメイドは塵芥集積場へ帰ってしまった。(血が騒ぐ)という言葉が私の脳裏を横切る。とにかく何か彼女を招くのに違いないのだ。

このメイドが戻った塵芥集積場には一万人以上の人々が住み着いていた。塵芥投棄が再開されると元の住民が集まって来る。塵芥の山にしか生活の糧を得られない貧困層住民なのだ。

パヤタス塵芥集積場の災害は、犠牲者の多さだけでなく、この国が抱える社会問題の根深さを浮き彫りにした。

(まにら新聞「二〇〇〇年十二月二十九日付・金曜日」)